

小説『女になる夢』

注意

- **成人対象** — 二十歳以上の読者を対象とします
せいじんたいししょう はたち いじょう どくしゃ たいしょう
- **小説** (フィクション) — 實在の事柄とは關はりありません。又、描寫中の行爲を
しょうせつ じつざい ことばら かかわ また びょうしやちゆう こうい
- **奨めるものではありません**
すす せいびようしや わだい ふく
- **性描寫** — 性に關はる話題を含みます
せいびようしや せい かかわ わだい ふく

作品情報

平成三十年十二月十一日 第一版發行

最終更新 平成三十一年一月五日

著・發行者 絲

letter@sinumade.net

<http://kimitin.sinumade.net/>

附録

『女になる夢』後書

<http://kimitin.sinumade.net/2018/5-atogaki>

『女になる夢』HTML版

<http://kimitin.sinumade.net/2018/5>

『女になる夢』テキスト版

<http://kimitin.sinumade.net/2018/5-text>

『女になる夢』は、著作権に關はる權利を拋棄してゐます。
詳細は、後記を御覽下さい。

Creative Commons — CC0 1.0 全世界

<http://creativecommons.org/publicdomain/zero/1.0/deed.ja>

女になる夢

「あれ」

暫く連絡がなかった友人の——名前の下、薄い番號が、見知らぬ番號になつてゐた。——電話番號、變つた？ やつぱ引越したのかな？ 彼は、環境の變化があつた、とこぼしてゐた。そのため逢ふのは難しいと。——彼とは、一年と四箇月逢つてゐない。さう、最後に逢つたのは昨年なつの八月——そこで、留守電メッセージが入つてゐる事に氣附いた。珍しい——こんな機能、一度も使つた事ないので。私は違和感のある心持で、再生ボタンを押した。こもりがちな、數箇月ぶりの彼の聲がきこえてくる——いやにどきどきする。

「ああ、あのなあ、イト——と——今、仕事やめてきたところだ。それからなあ——性別が變つて、男から女になつた」

——は？

「男から女になつた」——仕事をやめた——てつきり引越しのメッセージかと思つてゐたのに——私は信じられなかつた。「彼」が！？ 私の好きな「彼」が！？

——急速に氣持が冷めていく氣がした。いや、私の中の「彼」は、「彼」だし！ いきなり「彼女」と言はれても——どう扱つていいかわらなかつた。そして、「彼」の中にそんな葛藤があるとは、思ひもしなかつた。いつから？ 何で？ そんな素振りなかつたぢやない？ ——といふか、「男」を謳歌してゐたぢやない！？ あなたの立派なペニスは、「女好き」はどうなつたの？ またセックスできないの？ シラユキさん……

私は「彼」と寝そべつてゐた。——何も變る事ことがない。私の中ではどの男より男らしい男だ——私はまだこの人が好き——でもそれはどうなの？ この人を「男」と見る事はいけない事なの？ ——もう何をどう感じていいのかも分らなかつた。——だつて、さう感じちやふものは仕方ないぢやない？ どうして？ いけない事？ 好きをとしと感ずる事は不敬？ ……

「——それで、シラユキさんは、好きな性別は、どうなの？ 見た目的な「男」が好きななの？

「女」が好きななの？ 嗜好に變化はあつたの？ ……」

「……」

「つていふか、戸籍は變へたの？」

「いや」

「彼」ならば——突つ込んで聞いても構はないだらうと、私は浴びせかける。

「世間の人には「トランスジェンダー」つて言はれるんだね」

さう、トランスジェンダー。まさかこんな身近ところで。でも戸籍がそのままならば、明かさない限りさうは見られないだらう。

「トイレは？ 風呂は？ ……どつち入るの？ ……あのね、『ヒロネット』つていふサイトにはね、トランスジェンダーのインタビューとかたくさん載ってるんだけど、面白いよ」

戸籍も、トイレも、風呂も、そのインタビューから得られた視點だつた。今日から女になります、といふのは、さう簡単なものぢやない——私たちはかなり日常的な部分で、性別を問はれてゐる。『彼』が本質的に女として生きるなら——どうなつていくのだ？ そもそも「女」つて何なのだ？ 彼は何をどう「女」と感じてゐるのだ？ その、『男』と『女』の境目ちがひつて何！？ 女のトイレ使へば女なのか？ 司法が認めれば女なのか？

——もう、わけが分らなくなつてきた。當人でもないのに、こんな事で悩みたくない。

「ねえ」

私は當の、大問題を言つた。

「私は……シラユキさんの事、好きでいいのかな？」

「……まだ好きで、ゐてくれるんか？」

「だつて、私の中では……駄目かな？」

「いいんよ、どうでもいいんよ……」

彼は腕を廻し、私を抱いた。

彼の見えぬ闇の中で、私は泣いた。

私は彼の特質を利用して好きなのだけれど、それでいいのかな。彼はどう扱あつかはれたいのかな——彼が私といふ女を叩き出すまで、彼は、私の中の一番の男。

〈了〉